荒川ふるさと文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(04)0053号

図１　絵葉書「隅田駅構内運河上ニ架設ノ鉄道跳上橋ノ全景」（当館蔵）

古写真に見る歴史世界⑦

千住の「跳上橋（はねあげばし）」

隅田川駅に跳上橋があった？　水面ギリギリに架かる重たそうな鉄の橋（図１）。実は図２の橋のように動きます。これは昭和４年（一九二九）、東洋一の可動橋と呼ばれた古川可動橋（芝浦跳開橋（ちょうかいきょう））です。どちらの鉄橋の絵葉書にも「山本工務所」と印刷されています。「山本」とは、可動橋の第一人者といわれた山本卯太郎（一八九一～一九三四）のことです。

図１の上部の文字を読んでみると、「第一回当所設計及架設ニ係ル東京市常磐線隅田駅（ママ）構内運河上ニ架設ノ鉄道跳上橋ノ全景（径間五十呎（フィート））」とあります。つまり隅田川駅構内にあった隅田川駅跳上橋（全長15ｍ）と考えられます。大正15年（一九二六）７月に竣工した日本初の跳上橋で、日本石油が隅田川駅から敷地内へ鉄道を引き込む際、運河の水上交通の妨げにならないよう可動式になりました。地図（図３）の○の所に架かっていました。東京では数少ない可動橋の一つでしたが、昭和36年11月に始まった運河の埋め立てにより撤去され、現存しません。

図１は、最新の施工をした山本工務所の宣伝絵葉書と考えられます。古写真には、その時の風景の記憶はもちろん、カメラを向けた意図までもとらえられているといえそうです。

古写真に残された風景　当館では、明治・大正から昭和７年に荒川区が誕生するまでの古写真を紹介する企画展を下記の通り開催します。文字や物からだけでは伝わりきらない、あらかわの歴史を写真で振り返ります。初公開の写真もありますので、ぜひご観覧ください。

また当館では、戦前・戦後の区内の建物・風景・暮らしを写した写真を収集しています。ぜひ情報をお寄せください。

〈高柳吟音〉

令和４年度荒川ふるさと文化館企画展

カメラがとらえた あの日 あの場所

Arakawa Photo History

10月29日土～12月4日日

図３「新東京荒川区詳細図」（部分）、1947（当館蔵）

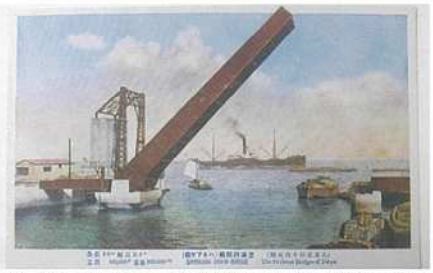

図２ 絵葉書「(大東京の十六大橋)芝浦跳開橋(ハネアゲ橋)」（当館蔵）

文化財News速報！

コロナ禍に地域の行事・伝統の技を伝える

新型コロナウィルス感染症は文化財保護の活動にも大きな影響を与えました。今回はそんなコロナ禍の下で行われた活動を２つご紹介します。

三河島山車人形・稲田姫（いなだひめ）と熊坂長範（くまさかちょうはん）、成田市へ！　荒川区指定有形民俗文化財である三河島山車人形・稲田姫と熊坂長範が成田市文化芸術センタースカイタウンギャラリーで行われた「関東の山車人形と成田祇園祭展」に出展しました（図１・２）。６月25日～７月10日まで多くの山車人形とともにお披露目され、たくさんの方々にご覧いただきました。荒川区の文化財である両山車人形が区外で展示公開されるのは初めてのことです。

図１　稲田姫

図２　熊坂長範

稲田姫は人形師・古川長延（ちょうえん）によって江戸末期から明治初期頃に製作されました。熊坂長範も古川長延によって明治時代に製作されたと伝えられています。２体ともほぼ製作された当時のままの姿を残しており、保存状態も良いため、大変貴重な文化財です。

今回の出展は、山車人形を保存している稲田姫保存会と荒川中央町会が成田市から依頼を受け、実現したものです。展示にあたっては、氏子祭りの中止により２年間実施できていなかった組み立て作業をみんなで行い、技術を確認し、継承しようとの思いから、若手を含む多くの会員が参加しました。この組み立て作業も区の無形民俗文化財に登録されています。久しぶりの組み立てでしたが、山車人形の道具が会場に到着すると保存会の皆さんの手によってテキパキと組み立てられていき、あっという間に完成しました。

そして今回の展示ではその姿を間近で見ることができ、稲田姫は真っ白なお顔と紅がうっすら残る唇とのコントラストがとても美しく、熊坂長範は歌舞伎のような見得をきる力強い目、そして左手と左足を張る姿から発する緊張感と迫力に圧倒されました。会場では稲田姫と熊坂長範の前に多くの人だかりができるほど大変な人気でした。

なお、三河島山車人形は毎年６月上旬に行われる素盞雄神社（南千住６丁目）の天王祭（区登録無形民俗文化財）の際に、神酒所等に飾られます。

伝統技術展、３年ぶりに開催！　７月２・３日、荒川総合スポーツセンターで３年ぶりに「第41回あらかわの伝統技術展」が開催されました。共催である荒川区伝統工芸技術保存会と何度も打ち合わせを重ね、様々なコロナ対策をした上で、例年より１日短縮して、２日間で開催しました。

図３　会場の様子

会場では職人さんが展示、実演販売をし、その技術を多くの方々にご覧いただくことができました。来場者の方は作品を間近で見ながら、その取り扱い方や保管方法などを直接職人さんから聞いて、作品を求めていました（図３）。来場者からは「職人さんと直接お話ができて楽しかった」、「毎年続けてほしい」などの感想をいただき、久しぶりの技術展は、大好評で幕を閉じました。

区では、今後もコロナ禍に負けず、文化財の保護に取り組みます。

〈堀米真由〉

あらかわタイムトンネルズ㉝

あらかわと榛名山

―雨乞い駅伝?!　榛名詣―

この夏、筆者は群馬県高崎市の榛名神社を訪れた。榛名神社は榛名山の西南、榛名川上流にある神社で、約７００メートルの長い参道に沿って清流が流れている。随所に林立する老杉、巨岩奇岩、夥しい数の石造物に圧倒されながら、本殿を目指して進むうちに、とある古老の話を思い出していた。

三河島の雨乞い　それは、昭和30年（一九五五）刊行の『新修荒川区史』上に収められている榛名山にまつわる話だ。

「六、七月の頃、旱魃が続くと雨乞いが行われた。夏の炎天に蓑笠を着けて、遠く榛名の山（榛名神社）へ参拝し、榛名湖の神水を用意した青竹の筒に入れて、持ち帰るのである。代表は身を浄め白衣をまとい、青竹を高く捧げて「南無榛名八大竜王、六根清浄」と唱えながら宿次で馳せ帰ってくる。それを村人は飛鳥山下（北区）で出迎え、一同天王様（素盞雄神社）に参拝し、河辺（ハンノキ山）で水垢離をとり、神水を篠にふりかけ、かけ念仏を唱えながら田へふりかけて廻る。すると不思議と雲が湧き大雨が降った。竜王が怒って湖水の水を取返そうと後を追いかけてきて、篠つく雨を降らせるからだと伝えられる（適宜ルビ、読点を補った。丸括弧内は区史編纂時昭和28年の「座談会記録」等による）。

タスキは青竹の水筒　この話は、三河島（現・荒川）で農業を営んでいた男性からの聞き書きである。「座談会記録」の記述と合わせると次のようなことが分かる。

①かつて、明治時代の頃、区内に榛名講の雨乞講が存在した。②旱魃の時には代表が竹の水筒に神水を汲むために榛名山に参詣する。③村に帰る時には止まってはいけない。途中で止まるとそこで雨が降ってしまうので、リレー方式で神水を持ち帰った。④村人は蓑と笠を着し、幣束を持参して素盞雄神社にお参りしハンノキ山（現、第五中学校付近）で水垢離を取る。⑤神水を篠竹で田に振りかけると雨が降ると信じられていた。⑥雨が降る理由は榛名湖の水を取り戻そうと追いかけてきた竜王の力によると考えられていた。

図１　榛名神社の萬年泉

③の通り、榛名山からの帰途は大変だ。立ち止まることなく、駅伝のタスキのように神水を入れた青竹水筒をつなぎ、村まで持ち帰らねばならない。代表には、かなりの健脚な若者たちが選ばれたことであろう。かつてのお参りは〝雨乞い駅伝〟ともいえそうな過酷なものではあるが、水垢離、篠竹による祈雨の厳かな儀礼からも日照りがもたらす深刻な状況や、榛名山に対する農業神としての信仰の深さが見て取れよう。

萬年泉の御神水　榛名神社には「萬年泉」と呼ばれる湧水がある。聖域にふさわしく朱の木柵で囲われている（図１）。雨乞の際には萬年泉で神水を汲んで請雨の御祈祷をしてもらってから帰るのだそうだ。三河島の代表は榛名湖の水を持ち帰ったというが、萬年水で汲んだのかもしれない。

町屋・尾久の榛名講　榛名山への信仰は、近世以降に講が組織され、関東一円に広がりを見せていた。町屋の古老の話によると、榛名講（代参講）も確認できる。それによると春先に代表５人が榛名山に参り、お札を受けた。その中に早稲・中稲・晩稲の文字があり、その通りに稲の種を蒔いたという（『郷土あらかわを語る』）。これは榛名神社で１月15日に行われる筒粥神事での占いの結果を記したお札と思われ、尾久の旧家にも筒粥神事のお札が伝わっていた（図２）。大正時代の末頃から急激に都市化が進み農地が減少すると、あらかわの村人と榛名山との関係は、薄らいでいった。

図２　尾久の旧家にあったお札（当館蔵）

しかし榛名山は、農業神のみならず、鎮火、開運、商売繁盛の信仰も集めている。今後も、あらかわと榛名山との関係を改めて紐解いてみたい。調査はつづく。

〈野尻かおる〉

収蔵庫のイッピン！ 十四品目

仕置場の切組灯籠「歌舞伎座狂言小塚原地蔵前之場」

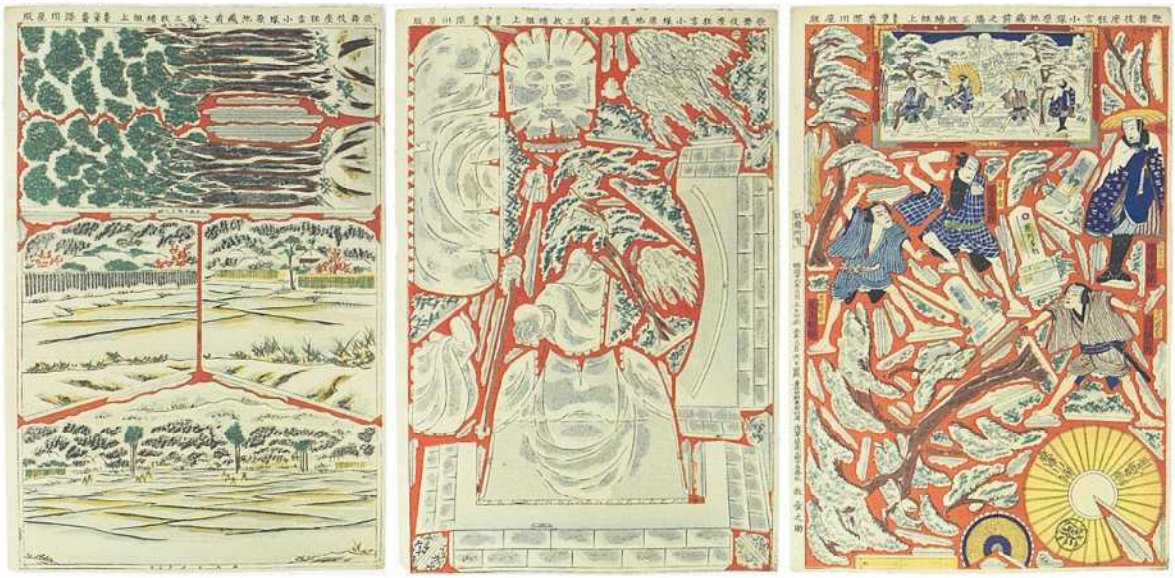

図１　「歌舞伎座狂言小塚原地蔵前之場」（三枚続）

パノラマ状の小塚原の仕置場　場面は小塚原の仕置場。明治26年（一八九三）、歌舞伎座で上演された「安政三組盃（あんせいみつぐみさかずき）」の一場面である。「安政三組盃」の四幕目「小塚原地蔵前の場」では、原幸吉（尾上菊五郎）が持つ守袋に入った証文を奪おうと、黒鴨友助（尾上松助）と藤兵衛（市川猿之助）が、雪の降る首切り地蔵の前に連れ出して大立ち回りをする。その後、幸吉は倒されて、懐を改めているところへ旅姿の杉田大内蔵（坂東家橘）が通りかかり、両人は逃げ出してしまう。二代目松林伯円の講談を移植した芝居で、評判がよく大入りが続いたという。

図１は地蔵の顔に放射線状ののりしろがあるが、全てを切り取って、組み立てて、配置すれば先の場面が完成する。こうした木版画を切組灯籠（きりくみとうろう）といって、芝居を題材とするものも多い。木版多色摺で作られており、浮世絵同様、版元や絵師、彫師・摺（すり）師の手を経て販売された。版元は蔵前の深川屋で、絵師は不明である。

組み立ててみて気付いたこと　さて、この切組灯籠を「速報！　あらかわの文化財展」の関連イベント「江戸のペーパークラフト　首切り地蔵を作ろう」で、参加者と一緒に組み立ててみた。まず、全てのパーツをハサミで切り取る。余白はほとんど残らない。なるべく余白が残らないように、パーツをちりばめるのは、絵師の腕の見せ所だったのかもしれない。次に各パーツを糊で接着していく。目安になるのは、○や□などの記号で、よく見るとのりしろ部分に印刷されている。同じ記号の部位をくっつけるという訳だ。もう一つ参考になるのが、右の一枚の上部にみえる「完成図」で、当たりをつけながら組み立てる。時に切り取り線のない部分に切れ込みを入れ、くっつけるのも上手に仕上げるコツだ。地蔵の胴の部分のように、曲げながら接着することで、立体感を出す部分もある。

何しろ細かいが、やはり「完成図」を参考に各パーツを配置して完成（図２）。『東京風俗志』によると、屋根付きの小さな箱の中に入れ、裏から火を灯したという。だから切組灯籠なのだろう。綿で雪を表現したりするなど、さらに工夫を凝らしたらしい。

組み立ててみて　イベントはパーツを配置したところで時間いっぱい。参加者と一緒に展示室に飾ってある本物を改めて見に行こうということになった。

切組灯籠は、おもちゃ絵の一種である。大人でもなかなか手強いものの、手伝えば、小学生も楽しく作るのではないか、そういうイベントがあってもよいのでは、というご意見を参加者から頂いた。元々、切組灯籠とは、家族と一緒に作り、コミュニケーションを生み出す木版画だったのかもしれない。

〈亀川泰照〉

図２　完成（製作：髙柳吟音）